

## 「奈良美智がつくる茂田井武展 夢の旅人」

執筆者：上島史子

掲載カタログ：「奈良美智がつくる茂田井武展 夢の旅人」ちひろ美術館 2017年

戦中から戦後の混乱期の子どもの本で活躍した茂田井武。その絵は大切に受け継がれ、後に続く多くの画家たちにも影響を与えてきた。今まさに美術作家として世界的に活躍する奈良美智も、茂田井の絵に心ひかれるひとりである。

1956年に茂田井が亡くなった3年後、奈良は青森県弘前市に生まれた。茂田井の絵との出会いを奈良は次のように語っている。

「美術を志したのは、17歳のときだった。田舎に育ったので、世界の有名な絵や彫刻はまったく知らなかった。自分はなにを見てこういう道に進もうと思ったのかと振り返ったときに、子どものころに見ていた絵本という存在が、すごく大きかったことに気がついた。そうして昔見た絵本を確かめていくなかで、再発見した人が茂田井武だった」。

奈良は当館に収蔵された茂田井の作品が見られるなら、展覧会を引き受けようと思ったという。実際に千点を超える収蔵作品のひとつひとつにあたって、初期から晩年までの幅広い年代の作品を選び、展覧会を構成した。茂田井の絵は、戦後の日本の絵本の草創期の名作『セロひきのゴージュ』で知られているが、奈良はその奥にこれだけの絵があることを見せたかったという。奈良が選んだ作品は、ほとんどが発表するために描かれたものではなく、折々の茂田井の内面が色濃く表れた作品である。「見せるための絵じゃないもののほうが古びない。見せるための絵じゃない、というのは、力量が読者側にあるか、自分との対話であるかということだ」と、奈良は絵を選びながら語っていた。

茂田井は1908年、東京でも有数の旅館だった日本橋の「越喜」の次男として生まれた。戦後描かれた手の平に乗るほど小さな折本「幼年画集」には、幼いころの印象が、透明感のある水彩画で描かれている。着物姿に前かけや学生帽の姿で描かれる幼い茂田井は、布団部屋で息を潜めてかくれんぼをしたり、友達の前で得意げにナポレオンの絵を描いてみせたりしている。15歳のときに生家の旅館が関東大震災で全焼し、翌年には母を亡くした茂田井にとって、幼少時代の記憶は、生涯にわたってかけがえのないものとなった。

彼のその後の人生は波乱にとんだものだった。父の再婚相手とそりがあわず、美術学校の入試にも失敗した茂田井は、次第に自分の居場所を失っていった。1930年、21歳のときに、写生旅行と称して鞆一つで東京を発ち、働いて旅費を稼ぎながらパリを目指した。

パリでは日本人クラブの食堂で皿洗いや給仕の仕事を得て、近所の子どもたちに紙芝居を作って喜ばせたり、週末には場末の酒場に出かけて飲み明かしたりと、市井の生活にとけ込んでいった。夜毎小さ

な画帳に日々の印象を描くというのが彼の作画手法だった。渡欧時代の画帳「Parisの破片」や「続・白い十字架」には、心に留まった風景や印象的な人物、夢の断片などが日記のように綴られている。発表するあてもなく描かれた青春時代の画帳は、彼の表現が、既存の美術から学んだものではなく、自身の内面から引き出されたものであることを示している。3年に渡るこの旅の印象は、その後も繰り返し画題となった。

「若いときにする旅は、自分の感性を何倍にもしてくれる」と奈良はいう。彼自身、20歳の時に一人で初めて海外旅行に出かけ、3か月間ヨーロッパとパキスタンを放浪している。茂田井の画帳を見る奈良の姿に、遠い異国で自由を謳歌し、感性を研ぎ澄ます二人の日本の若者の姿が、時を超えて重なるように感じられた。

帰国後の茂田井は、さまざまな職を転々とした後、1935年から探偵小説の雑誌「新青年」に挿絵を描くようになり、怪しい詩情漂う絵で注目を集めた。幻想的な青やセピアを特徴とする当時の作品は、濃い闇とほのかな光を湛え、現実とも夢ともつかない世界を形づくっている。1940年代前半の日記には、鬱屈した心境と共に、次のような言葉も記されている。

「嗚呼、美しい美しいものがどンドン散ってゆく、散らばって消えてゆく、平然として失せてゆく。その悠々としてしかも何でもなさそうな様子の美しいことはどうであらう。(中略)一寸でもいい、そのかけらでもいいから手に取ってみたいが到底無理だ」。

1942年に茂田井は結婚し、翌年には長女が生まれた。しかし戦時色が強まるにつれて、挿絵の仕事は減り、仲間に勧められて子どもの本の仕事も手がけるようになる。日記には戦争が日々激しさを増していくようすが記されている。

1944年に召集されて中国に出征した茂田井は、北京で終戦を迎えた。1946年1月、空襲で焼けた東京に復員してからは、あふれるような勢いで自由に絵を描き出した。当時の画題は子どものころの記憶や、童話やおもちゃなど、童心に根ざしたものが多かった。描いた絵を3畳の画室の壁や襖いっぱい貼り出し、疎開先から戻った幼い娘をひざに抱いて、絵をみながらお話を聞かせることもあったという。長男と次女も生まれて、茂田井は3人の子の父親となった。子どもたちは、茂田井にインスピレーションを与え続けた。描き損じの絵や反故にした紙の裏は子どもたちの絵で埋められ、日記には子どもと過ごす時間の尊さ、その愛しさが日々綴られている。

一方で児童雑誌や絵本などに、茂田井は夥しい数の絵を手がけている。終戦間もない時期の印刷物は、まだ紙も印刷技術も粗悪で、原画もほとんど手元に戻ることはなかったが、子どもたちを楽しませたいと童画家としての仕事に打ち込んだ。1952年頃からは体調を崩して闘病生活に入るが、命を削るように絵を描き続けた。最晩年の絵本『セロひきのゴーシュ』は、病の床で筆を持つこともままならない状態

で描かれたという。宮沢賢治の童話を見事に視覚化した名作として今も読み継がれるこの絵本を完成させた半年後、1956年11月2日に茂田井は48歳の生涯を閉じた。まさにこれから、日本の絵本が大きく花開いていこうとするときだった。

茂田井のイメージの源泉は、自分のうちにある記憶のなかの光景にあった。茂田井は自分の絵について次のように語っている。

「『その時のそのまゝ』と私を納得させる雰囲気、これは月と共に日と共に暖められて、次第に朦朧な輪郭から鮮明度を加えていく。現象液の中で印画紙を揺すぶっているようなもので、もしその時それ以上の濃度でしか映像が現れない場合はそこまでを第一号として保存し、次の機会のデッサンにゆだねる。ピンボケ印画は回を重ねるごとに自分の意に添ってくれる。」\*

茂田井の描くごく私的な記憶は、いつかどこかで見た懐かしい光景を呼び覚ます。奈良は茂田井の絵を見て「おじいさんの引き出しから古い写真をみつけた」ように感じたといい、展覧会の見せ方を考える上でのキーワードとした。

描かずにはいられない切実なものを自分の内に抱いて、それを追い求めながら絵を描くという資質は、茂田井と奈良とに相通じるものだろう。奈良は「何が描かれているかだけでなく、どう描かれているかを見てほしい」という。色の重なるの奥に、その人の生き方や絵を描いてきた経験が表れる。それが絵の深みになり、言葉では言い表せないものを、見る人の心に語りかける。それは茂田井の絵に対する言葉であると同時に、奈良自身の制作に対する姿勢を示すものでもある。

\* 「印象のレンズ 私の描きたい絵」（「教育美術」1952年5月号）より 1952年